

頭の中が真っ白になっていた。

海外でのひとり旅で一番重要なもの。それは命。その次はお金だと思う。パスポートなど無くしたところでその国の警察や大使館に駆け込めばどうにかなるし、それ以外の物なんてお金さえあるのなら買えばすむ。でもお金が無かったら行動できない。泊まる事も食べる事も移動する事もできなくなってしまうのだ。

明日の朝には憧れの亜丁に出発だという所まできているのに、此処まで来てお金が無い事に気づくなんて～！！！！

正確に言えばお金はあった。ただし日本円でなら。亜丁へと逸る気持ちで先へ先へと突き進んでしまった私は、成都で日本円を十分な中国元に両替しておくのをすっかり忘れていたのだ。

何度も繰り返すが稲城は四川省の山奥のまた奥の小さな街だ。外貨を両替できる場所なんてあるはずが無い。理塘まで戻ったところで同じ事だ。康定まで戻ればどうだろう・・・康定だって怪しいものだ。

財布の中に残されているのは500元程度だけだった。亜丁で数日過ごし稲城に戻った後、理塘で数日滞在。その後他の場所に立ち寄りながら成都に戻るのは3週間後の旅の最後のつもりだったが、500元ではそれまでの宿泊費、食費、交通費など考えても足りるはずが無かった。稲城から成都までの交通費だけでも200元以上かかるのだ。しかも聞いたところによると亜丁は中国の自然保護区に指定されているため住民以外の者が立ち入る場合は入場料として150元徴収されるとの事だった。それを考えればこのまま亜丁に行った後、まっすぐ成都に戻るにしたら手持ちの中国元では十分でない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう・・・

いくら考えたところで旅をつづける方法は一つしかなかった。再び2日ばかりで成都に戻り、日本円を両替して出直してくる事だけだ。しかしこれから成都に戻って出直していたら貴重な旅の時間が更に一週間無駄になってしまう。うわ～ん！！此処まで来て～！！私のバカ、バカ、バカヤロウ～！！！！

その時私の脳裏には今から10年以上前に訪れたマレーシアのクアラルンプールで知り合った日本人のおじさんの姿が浮かんでいた。それは私がタイのバンコクに2年ほど滞在していた頃の話で、タイのビザを延長するための手続きを兼ねマレーシアを旅行していた時の事である。季節は丁度クリスマスシーズンで街はイルミネーションで彩られていた。熱帯のイスラム教国であるマレー

シアでは殆ど実感がわかなかったのだが・・・。

その時もやはり私はバックパッカー向け安宿のドミトリーに泊まっていた。そこで知り合った数人の日本人旅行者の中に面白いおじさんが混じっていたのだ。職業はなんと歌舞伎のバックで鼓を打つのがお仕事というお方だった。

シンガポールに滞在した後、クリスマスはクアラルンプールで過ごそうと電車で10時間かけてやってきて、宿の宿泊手続きをしようとしたところでシンガポールの宿のセーフティボックスにパスポートを忘れてきた事に気づき、慌ててまた電車でシンガポールまで取りに戻ったのだそうだ。

おかげでクリスマス夜の夜は電車の中で過ごす羽目になったという話を聞いた私たちはお腹を抱えて笑ったのだったが、ここで両替の為に2日ばかりで成都まで戻るような事になれば、あの時のおじさんよりもっと間抜けなエピソードを残してしまう事になるじゃないか～！

思わず涙ぐみそうになったその時だった。突然私の頭に神の天啓が閃いたのだ。

再び思わず息を呑み、あわてて財布の中に溜っていたあちこちの名刺やレシートなどを取り出してベッドの上にはら撒くとその中から一枚の名刺を見つけ出した。

「あった～！！！」

それはこの一人旅の序章である四姑娘山の旅の最後に、康定の路上で偶然に、本当に偶然に出会った烏里烏沙(ウリウサ)氏が「何かあったら電話していいよ」と携帯電話の番号を走り書きして渡してくれた物だった。

以前「わりい」紙上でも中国の少数民族について原稿を書かれていた烏里氏は四川省の出身だ。現在は日本在住だがこの時は丁度日本人旅行者をチベットへ案内する仕事のために中国に帰っていたのだそうで、稲城の隣街である理塘には彼の親戚も住んでいるし、NPOの活動で行っている東チベット高原に小学校を立てる活動やその基金を集める為、旅行者の案内人としてしょっちゅうこの辺りの土地を訪れている彼にとっては稲城など地元のようなものだろう。烏里氏だったら何か良い方法を知っているかもしれない。

名刺を握りしめて部屋を飛び出すと、泊まっていた青年旅舎の事務室を訪れた。

「お願い！緊急の用事があるので電話させて下さい！！！」

従業員の部屋も兼ねている事務室には奥の方には二段ベッドがならんでおり、例のやる気のなさそうな旅舎の女性は丁度寝ようとしているところだった。

「何よ〜。私の仕事時間はもう終わっているのよお」

「お願い！お金を払うから電話を使わせて！」

「早く済ませてよ。私はもう寝るんだからね」

そういいながら彼女はベッドの中に入ってしまった。私はかまわず卓上にあった電話の受話器を取り上げ烏里氏の番号にかけてみる。が、聞こえてくるのは録音されたメッセージの女性の声だけだ。中国語なので何と言ってるのか解からない。何度かけなおしても同じだった。

「ねえ！電話が繋がらないの！何て言ってるのか聞いてくれませんか！？」

宿の女性に声をかけるが、

「私はもう休んでるのよ。疲れてて眠いんだから静かにしてよ」

と布団にくるまったまま起きてくる様子もない。くそ〜！何なんだ、この宿は！外国人の宿泊客が困ってるっていうのに！

「ねえ！お願い！緊急の用事なの！」

もう返事もかえってこなかった。

その時である。切迫した様子の私を見かねたのか、それまで同じ部屋のなかでパソコンに向かっていた女性が立ち上がると「どうしたの？」とそばにきてくれた。どのような事情で彼女がこの部屋のパソコンを使っていたのかはわからないが、宿の従業員ではないようだった。

「緊急でかけたい電話が繋がらないの」

彼女が私に代わって電話のメッセージを聞くと「相手が携帯電話だから普通の電話からじゃ繋がらないのよ」と自分の携帯電話をとり出し烏里氏の番号を押した。今度は直ぐに電話がつながり彼女が話し始める。

「あなた烏里さん？ここにあなたと話したいという日本の女性がいるの。今すぐ私のいう番号にかけなおしてくれる？」

彼女が電話を切ると直ぐに事務所の電話が鳴った。

「烏里さ〜ん！！」

海外でピンチの状況に知人と日本語で話せるって事はなんてホッとする事だろう。電話が繋がっただけで、私は今の状況が全て解決したかのように嬉しい気持ちになりかけてしまったのだが、本質的な問題は未だ大きく横たわったままなのだった。

「それは困りましたねえ・・・」状況を説明すると烏里氏も受話器のむこうで声を曇らせた。やはり稲城や理糖では銀行で外貨に両替する事などまず無理だし、康定でもむずかしいとの事だった。稲城には烏里さんの友人もいないし、この辺の土地の人間は日本円になじみも無いので両替を頼む事もできないそうだ。

「ちょっと待ってて下さい。私も何か方法があるか当たってみるから。とりあえず一旦電話を切って、またそ

ちらにかけ直します」

受話器を置くととりあえず部屋に戻って連絡を待つことにした。とにかく烏里氏に連絡がついたことで気持ちは落ち着き、最悪の場合は成都まで戻って出直す覚悟も決めた。

さっきまで一緒だったタクシードライバーのお兄ちゃんの顔が浮かんでくる。明日の朝私が行かないといったら、彼はがっかりするかなあ・・・

先ほどのパソコンの女性が部屋まで呼びにきてくれた。

「さっきの友達から電話が入っているわよ」

ドキドキしながら電話に出ると、烏里氏の明るい声が聞こえてきた。

「良かった！元子さん、大丈夫だよ！今日偶然、私の友人が稲城にいるので、彼が両替してくれますよ！今の正確なレートはわからないけど、だいたい1万円で650元くらいの筈ですから、彼にその金額で両替してもらって下さい。後で私が彼に会ってまた650円で両替しますからね。今のお金とあわせれば何とか足りるでしょう」

「ええー！！ 烏里さん！！ ありがとうございますうう〜！！！！バンザイ！！」

「私の友達は、今バスターミナルに居ます。今すぐバスターミナルまで行ってください。じゃあ気をつけてね」

外はいつしか雨が降り出していたがそんな事は全然気にならなかった。防寒のため丸々と着膨れした上に、登山用の上下ジョッキングピンクの合羽を着込んだ異様ないでたちで、私は夜の稲城の街をバスターミナルまで走って行った。烏里氏のお友達はさぞかしギョッとされたに違いないが、にこやかに私の1万円札と中国の650元を取り替えてくれた。

やった！やった！やった〜！！ これで明日、亜丁に行ける〜！！！

それにしても何てラッキーなんだろう！

烏里氏が今、中国に居る事も、康定で烏里氏に会って携帯の番号を教えてもらっていた事も、烏里氏の友人がたまたま稲城に居た事も、ぜ〜んぶ偶然なのだ。

普通なら完全にアウトだったところを数々の幸運に恵まれて、このピンチを切り抜けることができたのだ。やはりこれはもう神様に守られているとしか思えない！！ きっとこの土地の神様が私に来た事を歓迎してくれてるんだ！絶対そうだ〜！！ 神様有難う〜！！！！

もしあの時、目の前にチベット寺院があったなら私は迷わず五体投地していたに違いない。

